

# 日本農業の トップランナーたち

Japan Agriculture Award



合言葉は「地域と畑は自分たちで守る！」

# 県内約130人の若手農家が連携 獣害対策ネットワークを結成

熊本県宇城市

## くまもと☆農家ハンター

代表 みやがわ まさひと 宮川 将人さん

熊本県の「くまもと☆農家ハンター」は、深刻化する獣害に立ち上がった若手農家のグループだ。獣害が多発し、営農や生活にも支障が出始めたとき、「微力でも無力じゃなか」と130人が結集。電柵で害獣を遠ざける従来の「守り」だけにとどまらず、狩猟免許を取得して捕獲したイノシシを地域資源として生かす「攻め」へと転換した。猟友会・JA・行政・研究機関・IT企業などを巻き込み、新たなビジネスモデルの構築を目指している。



特別賞

Japan Agriculture Award



## 「もう農業やめようか」 地元農家のつぶやきに奮起

宇城市三角町で3代続く花き農家の宮川将人さん(41)が、イノシシ被害の深刻さを知ったのは平成28年。収穫直前のデコポンを一晚で食い荒らされた地元の高齢女性農家の「もう農業やめようと思う」という一言だった。さらには、耕作放棄地の増加がイノシシの餌場の増加につながり、農業被害だけでなく、イノシシと車の接触事故など、被害は日常生活にまで及び始めていた。

「このままでは離農どころか集落の崩壊につながりかねない」との危機感を抱いた。そこで宮川さんは、県主催の「く

まもと農業経営塾」の参加者に呼びかけ、「イノシシを考える農家合宿」を開催。宮川さんの思いに賛同した25人が集まった。議論の末にたどり着いた結論は、災害から地域を守る消防団のように、“獣害から地域を守る自衛団”を立ち上げることだった。農家自身が狩猟免許を取得してイノシシ駆除に乗り出す「くまもと☆農家ハンター」の結成に向けて動き出した。宮川さんは「猟友会の高齢化などで、プレイヤーが不足している。それなら実際に獣害を受けて、すぐに動ける地域に根付いた若手農家ほど最適なプレイヤーはいないと思った」と振り返る。

組織名の「☆」には、「地域の希望の星になる」という思いを込めた。参加メンバーは25～40歳。まだ経営の主導権が親にあり、農業にやりがいを感じにくい世代だ。だが、この活動は、自分が地域で役立っている実感や、地域の担い手としてのやりがいと自信につながったという。

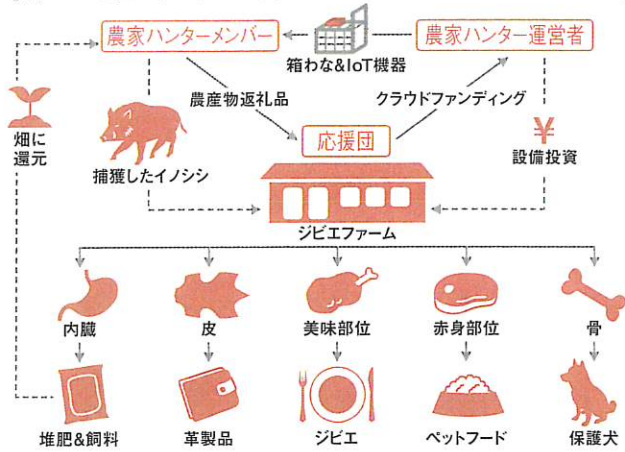
### 熊本県宇城市

宇城市は熊本県中央部に位置し、人口は約5万9000人。基幹産業は農業で、平たん地・中山間地域・半島地域それぞれの特徴を生かした農業を展開。同市三角町は有明海と八代海に挟まれた宇土半島先端地区で、デコポン(不知火)を中心とするかんきつ類や花き産地として高い評価を得ている。明治時代に築港された三角港は、全国屈指の貿易港として栄えた「明治3大築港」の一つ。

熊本県



## 【(株)イノPを核とするくまもと☆農家ハンターのビジネスモデル概念図】



一丸となって獣害対策に取り組む若手農家

頭規模と3倍に増加。IoT機器開発などでの企業協力、JA 熊本うき、行政、研究機関の支援など、活動の広がりとともに「イノコミ」の輪も広がりを見せている。

## 解体施設でイノシシを商品化 ソーシャルビジネス確立へ

令和元年、宮川さんと稲葉さんが役員となり、(株)イノPを設立。解体加工施設「ジビエファーム」を建設した。それまでくまもと☆農家ハンターの活動は全くのボランティアだったが、活動の持続性を考え、補助金に頼らず経済的に自立できるソーシャルビジネスとしての確立が必要と考えた。また、捕獲したイノシシは土中に埋設していたが、捕獲数の増加とともに限界が見えてきた。なによりも、捕獲したイノシシの命を奪う辛さを自ら経験することで、「奪った命を無駄にせず生かしたい」という思いが募った。

同社の社員となった井上拓哉さん(24)は、大学生のときに活動を知り、クラウドファンディングに10万円を支援したひとり。卒業と同時に移住してきたIターン者だ。販路として、直営ネットショップ「農家ハンターSHOP」を開設。精肉やハム・カレーなどの加工品の他、会員の生産した農産物なども販売している。今後は食肉だけでなく、赤身部分や骨はペットフード、皮は皮革製品、内臓は堆肥・飼料原料に生まれ変わらせ、イノシシの資源としてのフル活用を目指す。すでに複数の会社から取引の打診がある。

令和元年には、国連の公式サイトで、「生物多様性と地域社会を守るための農家の活動」として、同組織が



解体加工施設ジビエファーム

SDGsの優良事例の一つに紹介された。今後は他自治体へのノウハウ提供事業も視野に入れている。ビジネスとしての取り組みは始まったばかりだが、「住み続けられるまちづくり」を目標にした鳥獣害対策の新たな自治モデルは、国内外から注目を集めつつある。

また、獣害は栽培品目や地域の枠を超えて共有する課題でもある。それまで疎遠だった若手農家が広くつながり、栽培技術の情報交換も始まるなど、イノシシが若手農家のコミュニケーション活性化の起爆剤になった。くまもと☆農家ハンターでは、これを「イノコミ(イノシシ・コミュニケーション)」と呼んでいる。その結果、毎年関係者を集めて開くサミットの参加人数は年々増加している。

## ICT技術とSNSを駆使し 捕獲効率化と資金調達を実現

組織の活動は、宮川さんとプロジェクトリーダーの稲葉達也さん(41)の2人がけん引する。稲葉さんはかんきつ農家の3代目。平成29年、それまで勤めていた会社を辞めて狩猟免許を取得した。農業の傍ら、農家ハンターのメンバーへの技術指導にも当たる半農半猟の生活だ。まずはイノシシ対策を基本から学び、メンバーで情報を共有することからスタート。熊本県猟友会三角支部長の山本哲彦さんに師事し、座学から箱わな設置や捕獲、止め刺しなどの現場研修も重ねた。

農業と活動を両立させるため、情報通信技術も積極的に活用する。箱わなに通信機を付け、イノシシがかかったら携帯電話に自動通知するシステムの導入で、わなの見回り作業を省力化。イノシシが近づくと周辺画像を携帯電話に自動送信する機器なども購入した。これらのIoT(モノのインターネット)機器や箱わなの購入資金は、クラウドファンディングで調達。メンバーの農産物セットをお礼品にした4回のクラウドファンディングで、延べ500人以上から約600万円が集まった。さらに、くまもと☆農家ハンターの認知度向上やファンづくりという成果もついてきた。

里に降りてくるイノシシから地域を守る、あくまで自衛目的の駆除が基本。地域住民との講習会や、耕作放棄の防止によるイノシシの餌場の低減、防護柵の設置なども行っている。現在、地元の三角町内に設置された箱わなは約200基。会員は約130人で、わな猟免許の取得者は30人を超えた。若手農家の活動に地域も刺激され、以前は300頭以下だった同町のイノシシ捕獲数は、年間1000

# 第49回日本農業賞の受賞者

## 個別経営

- [大賞] 埼玉県横瀬町  
有限会社 小松沢レジャー農園
- [大賞] 愛知県豊田市  
いしかわ製茶
- [大賞] 長崎県小値賀町  
松崎 秀利さん 弘子さん
- [特別賞] 宮城県涌谷町  
有限会社 氏家農場

## 集団組織

- [大賞] 茨城県下妻市  
下妻市果樹組合連合会
- [大賞] 岡山県岡山市  
岡山市農業協同組合一宮選果場果樹部会
- [大賞] 愛媛県松山市  
JAえひめ中央 釣島支部
- [特別賞] 長野県南箕輪村  
農事組合法人 まっくんファーム

## 食の架け橋

- [大賞] 福岡県大木町  
株式会社 ビストロくるるん
- [特別賞] 熊本県宇城市  
くまもと☆農家ハンター

### 【個別経営の部】優秀賞

岐阜県高山市  
株式会社 和仁農園(水稲)

大阪府富田林市  
中筋 秀樹さん(ナス、キュウリ)

奈良県葛城市  
吉川 弘孝さん(葉ネギ)

### 【集団組織の部】優秀賞

福島県伊達市  
JAふくしま未来  
伊達地区きゅうり生産部会  
(夏秋キュウリ)

神奈川県小田原市  
SG21(かんぎつ、湘南ゴールド)

山梨県山梨市  
フルーツ山梨農業協同組合  
かのいわ中央共選所生産部会  
(モモ)

### 【食の架け橋の部】優秀賞

山梨県甲州市  
有限会社 ぶどうばたけ  
菱山中央醸造 有限会社  
(果樹、ブドウ)

### 【食の架け橋の部】奨励賞

栃木県日光市  
観世音そば下の家  
岩崎そば生産組合(ソバ)

## 第49回日本農業賞「個別経営の部」「集団組織の部」

### 審査委員

委員長 大杉 立(東京農業大学 客員教授)

安藤 光義(東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授)

鎌田 壽彦(東京農工大学 名誉教授)

柴田 道夫(東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授)

菅谷 純子(筑波大学 生命環境系 教授)

藤井 喜継(日本生活協同組合連合会 専務理事)

盛田 清秀(公立小松大学 国際文化交流学部 教授)

八木 洋憲(東京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授)

合瀬 宏毅(日本放送協会 解説委員室 解説主幹)

篠田 恵一(日本放送協会 制作局 第3制作ユニット 専任部長)

西野 司(全国農業協同組合中央会 農政部長)

## 第49回日本農業賞「食の架け橋の部」

### 審査委員

委員長 大杉 立(東京農業大学 客員教授)

伊藤 聡子(フリーキャスター、事業創造大学院大学 客員教授)

大村 美香(朝日新聞社 文化くらじ報道部 be編集記者)

榊田 みどり(農業ジャーナリスト、明治大学 客員教授)

岡田 直也(法政大学 教授)

二瓶 徹(株式会社 テロワール・アンド・トラディション・ジャパン 代表取締役)

篠田 恵一(日本放送協会 制作局 第3制作ユニット 専任部長)

生部 誠治(全国農業協同組合中央会 営農・くらし支援部長)

日本農業のトップランナーたち

第49回日本農業賞に輝いた人々

編集 / NHK・JA 全中

発行 / 全国農業協同組合中央会 (JA 全中)

制作 / 日本農業新聞

令和2年6月発行